

be Vp.p. to V 構文の準助動詞化 —準助動詞化を引き起こす要因に関する考察—

武内 祐樹

(関西学院大学)

1. はじめに

これまで *can* や *may* などの助動詞は、その統語的振る舞いや、根源的モダリティと認知的モダリティの意味の違い、通時的变化など、様々な観点から研究されてきた。一方、助動詞と見なす基準には完全には当てはまらないが、助動詞のような働きを持つ準助動詞と呼ばれるカテゴリーについては、*be going to* や *have to*、*might as well* 等の個別研究はいくつかあるものの、体系的な研究は、ほとんどない。本稿では、そんな準助動詞の中でも *be* 動詞+過去分詞を取るもの（以下 *be Vp.p. to V* 構文）を取るものに焦点を当て、準助動詞というカテゴリーを見直し、そして数ある *be Vp.p. to V* 構文の中でも *Vp.p.* の形容詞性が高いものが準助動詞として歴史的に変化していることを論証する。

2. 準助動詞とは

Quirk et al. (1985) は、助動詞を Table 1 の様に分類しており、(d)の SEMI-AUXILIARIES が本稿で取り上げる準助動詞である。

Table 1 Quirk et al. (1985) による助動詞の分類

(a) CENTRAL MODALS	<i>can, could, may, might, shall, should, will/ll, would/d, must</i>
(b) MARGINAL MODALS	<i>dare, need, ought to, used to</i>
(c) MODAL IDIOMS	<i>had better, would rather/sooner</i> <i>BE to, HAVE got to, etc.</i>
(d) SEMI-AUXILIARIES	<i>HAVE to, BE about to, BE able to, BE bound to, BE going to,</i> <i>BE obliged to, BE supposed to, BE willing to, etc.</i>
(e) CATENATIVES	<i>APPEAR to, HAPPEN to, SEEM to, GET + -ed participle,</i> <i>KEEP + -ing participle, etc.</i>

(Quirk et al. 1985:137)

Quirk et al. (1985) は、準助動詞として 8 つの表現を例に挙げているが、先行研究によりその分類や名称は様々である。本節では、先行研究における準助動詞の扱いをまとめる。

2.1 Carter (2006) による分類

Carter (2006) は、助動詞を Table 2 の様に分類している。

Table 2 Carter (2006) による助動詞の分類

(i) Core Modal Verbs	can / may / should / must / will ...
(ii) Semi-modal Verbs	ought to / need / used to ...
(iii) Other modal phrases	be to / be going to / had better ...
(iv) Other modal expression with BE	be about to / be able to / be bound to be certain to / be due to / be likely to, that be meant to / be obliged to / be supposed to be sure to

(Carter 2006:670)

本稿で取り上げる準助動詞は(iii)と(iv)に分類されているが、先ほどの Quirk et al. (1985) に追加して、be certain / due / likely / meant / sure to をその代表例に挙げている。

2.2 Westney (1995) による分類

先行研究の中でも、最も準助動詞について体系的に分析されている研究の 1 つが Westney (1995) である。この研究では、5 つの統語的基準と 5 つの意味的基準から判断して準助動詞を Table 3 の様に分類している。

Table 3 Westney (1995) による助動詞の分類

(a) modal idioms	had better / is to / have got to
(b) semi auxiliaries	have to / be about to / be apt to be bound to / be due to / be going to be meant to / be supposed to

(Westney 1995:37)

2.3 Bolinger (1980) の準助動詞というカテゴリーに対するコメント

これまでの 3 つの分類を見ても分かるように、何が準助動詞なのかという分類は一貫しておらず、またその呼び名も semi-auxiliaries や semi-modal 等があり、はっきりと定まっていない。このカテゴリーの名称について Bolinger (1980) は次のように述べている。

It is equally an error to try to create a category of ‘semi-auxiliaries’, implying that such a category would be amenable to its own special rules. This is why I have chosen to speak of quasi-auxiliaries. ... The moment a verb is given an infinitive complement, that verb starts down the road of auxiliariness.

(Bolinger 1980:297)

つまり、準助動詞というカテゴリーは、純粋な助動詞や動詞との明確な境界線を持つものではなく、動詞から助動詞への連続性の中に存在するものなのである。また最後に述べている、動詞が不定詞補文を与えられた時から、auxiliariness の道を歩み始めているという

意見は、準助動詞の形成を考えることにおいて非常に重要である。

3. 準助動詞というカテゴリーの再定義

Westney (1995) では、*be able to* が入っていない等、準助動詞の分類としては厳密過ぎるため、Bolinger (1980) のコメントも踏まえ、準助動詞を次のように再定義したい。

(1) 準助動詞とは、Modal の意味を持ち、動詞句を形成するものである。

ここでの Modal の意味とは「必然性」「義務」「可能性」「能力」「意志」等を含む。

当然、この定義に当てはまるものは数多く存在するが、その中で意味的・統語的・音韻的特徴を満たすほど、より「助動詞らしさ」が増してくるのである。本節では、Westney (1995) が使用した統語的・意味的基準を検証し、準助動詞の分析に必要な基準を厳選する。

3.1 Westney (1995) の統語的・意味的基準

Westney (1995) は準助動詞を識別する基準として以下の 10 個を挙げている。そしてそれらの基準によると、以下の用例のそれぞれ(2b)(3b)(4b)(5a)(6a)(7a)(8a)の方がより準助動詞らしさを持っている。以下の用例の訳は省略する。

Syntactic criteria

① the possibility, with *be + adjective/participle + to*-infinitive structure, of dropping *being* when in initial position in a sentence
(*being* を省略できない方が準助動詞)

(2a) Compelled to take stern measures, the administration lost popularity.

(2b) ?Bound to take stern measures, the administration lost popularity.

② omission of final infinitival *to*
(*to* を省略できない方が準助動詞)

(3a) He's keen to leave, but isn't able.

(3b) *He's keen to leave, but isn't about.

③ the possibility of qualifying the adjectival item in semi-auxiliaries by *very, more, most, quite*.
(*very, more* 等を挿入できない方が準助動詞)

(4a) He's very willing to organize people.

(4b) *He's very able to organize people.

- ④ the possibility of the insertion of an agent before the *to*
 (*to* 前に動作主を挿入できない方が準助動詞)

(5a) *He's bound by his knowledge to give the right answer.

(5b) If you believe this, you're bound by your conscience to act on it.

- ⑤ the possibility of construction with existential *there*
 (*there* 構文で使用できるものが準助動詞)

(6a) There used to be a school on the island.

(6b) *There hoped to be a school on the island.

Semantic criteria

- ① Lack of subject-auxiliary restrictions
 (主語の選択制限のないものが準助動詞)

(7a) The man ought to be here at five. / The bus ought to be here at five.

(7b) The man hopes to be here at five. / *The bus hopes to be here at five.

- ② Voice neutrality
 (能動態・受動態で意味の変わらないものが準助動詞)

(8a) Thousands of people will meet the president.

= The president will be met by thousands of people.

(8b) Thousands of people hopes to meet the president.

≠ The president hopes to be met by thousands of people.

- ③ Idiomatic status
 (各構成要素の意味の集合とは異なる全体の意味を持つものが準助動詞)

- ④ Modal meaning
 (法的意味を示すものが準助動詞)

- ⑤ Epistemic-non-epistemic alternation
 (認識的意味と非認識的意味の交代があるものが準助動詞)

以上の基準を用いて、確かに精緻な分析を行っているのだが、いくつかの問題点がある。まず、統語的基準 1 つ目の *being* の省略に関しては、完全に非文であるとは言い切れず、また過去分詞の場合、その形容詞性の度合いによって省略可能かどうかの判断が変わるため、有効な基準だと言えない。統語的基準 3 つ目の *very* や *more* 等の挿入に関しても、そ

もそもその **very** か **more** か等の副詞の選択によって、挿入可能かどうかが大きく変わるので、有効な基準ではない。そして、細かい統語的分析を行っているが、準助動詞というカテゴリーはモダリティと深く関わり、その表現の意味が重要なカテゴリーであるため、意味的基準を中心に準助動詞を識別すべきである。

3.2 準助動詞の再定義と意味的・統語的基準

Westney (1995) の問題点を踏まえ、本稿では(1)の定義に当てはまるもので、(9)の基準を満たせば満たすほど、より助動詞に近く、満たさなければより動詞に近い準助動詞であるとする。それは、Figure 1 のような全体像になる。

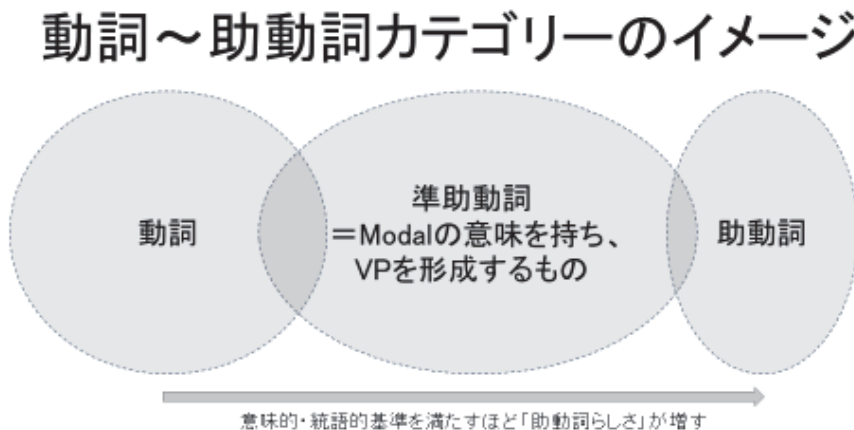
(9) 意味的基準

- ①主語の選択制限がない。
- ②能動態と受動態が中立である。
- ③認識的意味と非認識的意味の交代がある。

統語的基準

- ①There 構文で使用可である。

Figure 1 動詞～助動詞カテゴリーの全体像



以上の基準、とりわけ意味的基準③と統語的基準①を用いて、次節より具体的に準助動詞の用例をみていく。

4. 準助動詞化の要因と歴史的変化

Quirk et al. (1985) は、準助動詞として *be bound to* や *be obliged to* を挙げているが、同じような意味を持つ *be forced to* や *be compelled to* は準助動詞にはならないのだろうか。また、数多く存在する *be Vp.p. to V* 構文の中で準助動詞になるものとならないものの違いはどこにあるのか。本節では、準助動詞化の要因を形容詞的受身の観点から述べ、その歴

史的变化を *be bound to*, *be obliged to*, *be forced to*, *be compelled to* の用例を中心に検証する。

4.1 準助動詞化の要因—形容詞的受身と主語の性質

ある *be Vp.p. to V* 構文が Modal の意味を持ち、準助動詞になるためには *Vp.p.* の形容詞性が高く、主語の性質を表すようにならなければならない。というのも *can* や *may* 等の純粋な助動詞も歴史的に見れば、*can* は元々 *cunnan = to know, know how* で、*may* は *magan = to be strong* という動詞で、どちらも「主語が知っている」、「主語が力がある」というように主語の性質を表すような動詞から生まれたものなのである。*be Vp.p. to V* 構文も同じような道を辿れば助動詞に近づく。影山 (2009) は、受動態を動詞的受身と形容詞的受身に分け、形容詞的受身では動作主が背景化され、主語の状態や性質を表すと述べている。

動詞的受身と形容詞的受身

行為	⇒	変化	⇒	結果状態
能動態	⇒	動詞的受身	⇒	形容詞的受身

(影山 2009)

be Vp.p. to V 構文は基本的には受動態であるため、最初は動詞的受身だが、動作主が薄れ形容詞的受身になれば、主語の状態や性質を表す構文になる。主語の状態述語が Modal を表すというのは、Krifka et al. (1995), Chierchia (1995), Portner (2009) でも示されている。以上をまとめると、*be Vp.p. to V* 構文の準助動詞への流れは(10)のようなものである。

(10)	①元の能動態	S V O to V	
	②動詞的受身	S be Vp.p. (by ~) to V	⇒動作主が背景化されていない
	③形容詞的受身	S be Vp.p. to V	⇒主語の性質を表す
	④準助動詞	S be Vp.p. to V	⇒ be Vp.p. to が Modal を表す

この流れで準助動詞化していることを検証するために、用例を取り上げながら次の3点を確認する。

1. *Vp.p.*後の *by* 句頻度数の減少：*by* 句の減少は動作主の背景化を示す。
2. *There* 構文での使用頻度増加：*There* 構文での使用は強い準助動詞化を意味する。
3. *be Vp.p. to* に後続する動詞の変化：準助動詞化していれば、後続動詞も変化する。

準助動詞化が進んでいると思われる *be bound to* や *be obliged to* の方が、*be forced to* や *be compelled to* よりも上記の3点が当てはまることを次節より見ていく。

4.2 Vp.p.後の動作主 by 句使用頻度の変化

be Vp.p.の後に by 句が使われているということは、動作主が明示されているということであり、動詞的受身の色合いが強いことを表す。そしてその by 句が使用されなくなっていれば、動作主の存在が薄れ、徐々に形容詞的受身に近づいていることになる。本節では、COHA (The Corpus of Historical American English) を用いて、by 句使用頻度の歴史的变化をみていく。

まず初めは be bound to である。Middle English Dictionary (以下 MED とする) や Oxford English Dictionary (以下 OED とする) によると、bound の原形 bind は、1200 年から 1300 年頃に物理的に「結ぶ」「縛る」の意味で使われ始める。それが、次第に、人を何らかの行動に関して「束縛する」という義務の意味になり、受動態でも使われるようになる。その受動態 be bound の by 句使用頻度の変化が Table 4 である。(下線部は筆者。以下同じ)

- (11) He bynt him to perpetuall obeisaunce. (He binds him to obey her perpetually.)
(OED, c1374, CHAUCER *Compl. Mars* 47)
- (12) Thou art ybounden as a knight To helpe me.
(You are bound as a knight to help me)
(MED, c1385, CHAUCER *CT.Kn.* (Manly-Rickert))
- (13) I will become bound to make up all your losses.
(OED, 1772, H.MACKENZIE *Man of World*(1823) II. ix.476)

Table 4 be bound の by 句使用頻度変化

	1810-1859	1860-1909	1910-1959	1960-2009
be bound by	215(10%)	269(8%)	229(6%)	154(7%)
be bound to V	262(13%)	696(21%)	1200(32%)	758(33%)
be bound	2084	3297	3723	2309

この表を見ると、徐々に by 句の使用頻度が減っていることが分かる。さらに、be bound to V での使用頻度が増加していることも準助動詞化を考える上で重要である。同じように be obliged と be forced, be compelled の変化を検証したのが、Table 5, 6, 7 である。

Table 5 be obliged の by 句使用頻度変化

	1810-1859	1860-1909	1910-1959	1960-2009
be obliged by	17(1%)	24(1%)	27(1%)	12(2%)
be obliged to V	799(27%)	1336(30%)	556(26%)	127(19%)
be obliged	2948	4416	2171	654

obliged に関しては、総頻度数が減少しており、by 句の使用頻度はあまり変化しておらず、

be obliged to V の使用も減少しているため、先行研究では準助動詞として記載されているが、これらの観点から判断すると、準助動詞らしさが失われているように思える。

Table 6 be forced の by 句使用頻度変化

	1810-1859	1860-1909	1910-1959	1960-2009
be forced by	42(3%)	104(3%)	164(3%)	94(2%)
be forced to V	190(14%)	741(21%)	970(20%)	1016(22%)
be forced	1323	3579	4818	4623

Table 7 be compelled の by 句使用頻度変化

	1810-1859	1860-1909	1910-1959	1960-2009
be compelled by	62(3%)	105(3%)	71(4%)	35(8%)
be compelled to V	500(24%)	881(27%)	386(21%)	88(20%)
be compelled	2099	3216	1840	448

be forced に関しては、少し by 句の使用頻度が減少してはいるものの、be bound ほど大きな減少ではなく、また be forced to V での使用頻度も大きく増えていない。be compelled に関しても、総数が減っているという特徴もあるが、その中での by 句の使用割合は増加している。これら4つの表現の中では、be bound が最も動作主の背景化が進行しており、動詞的受身の色合いが薄れていると考えられる。

4.3 There 構文での使用頻度変化

動詞的受身の色合いが薄れた be bound to は形容詞的受身になり、(14), (15)のように主語の性質を表すようになる。そして「義務」の意味から認識的モダリティの「必然性」の意味を表すようになる。そして現在では、準助動詞の統語的基準である There 構文での使用が可能になっている。その変化を表したものが、Table 8 である。

(14) Life is a waiting race, in which the best horse **is bound to** win.

(OED, 1883, M.E. BRADDON *Ishmael*v)

(15) With a list of capabilities that long, the Pocket PC **is bound to** be Microsoft's strongest challenge yet to Palm's grip on the handheld category.

(COHA, 2000)

(16) Some have argued that, if China's Protestant Christian population is close to 70 million, it would make China's Protestants one of the largest such communities in the world. **There is bound to be** a consequence from the powerful position globally that China has come to occupy.

(COHA, 2003)

Table 8 There be bound to V

	1810-1859	1860-1909	1910-1959	1960-2009
There be bound to V	0(0%)	9(0%)	105(3%)	102(4%)
be bound	2084	3297	3723	2309

1800年代後半から、明らかに **There** 構文での使用が増えていることが分かる。**There** 構文での **be bound to** は元々の「義務」の意味はもはや感じられず、「きっと～だろう」や「～に違いない」等の認識的意味を表している。同じように **be obliged**, **be forced**, **be compelled** の **There** 構文での使用を検証したのが、Table 9 である。

Table 9 There be forced/compelled to V

	1810-1859	1860-1909	1910-1959	1960-2009
There be obliged to V	0	1	1	0
There be forced to V	0	0	0	0
There be compelled to V	0	0	0	0

oblige の **There** 構文での使用は、COHA では(17)(18)の 2 例のみである。

(17) Two farmers were discussing you at the post-office, and one of them said:" Tain't that he's got so much sense -- I had a sight more at his age -- but he's so blamed sure of himself, he makes you believe in him.' How's that for fame? " " Not so bad as it is for me, " returned Nicholas with a laugh. " If you win one or two small cases, **there 's obliged to be** undue influence of the devil. "

(COHA, 1900)

(18) If you could see the harm that's been done by mistaken charity! Why, look at my friend, Mrs. Page, now. She tried to work it out that way, and what came of it except more rottenness? And yet until the State looks after the unemployed, **there is obliged to be** charity.

(COHA, 1922)

確かに、**There** 構文で使われている **be obliged to** は認識的意味が感じられるため、頻度は低いものの準助動詞らしさが少し感じられる。また、1960年代以降に 1 例もないということは、Table 5 で検証したように準助動詞らしさが失われているという見方と一致する。**force** や **compel** は **There** 構文での使用は COHA では、1 例もない。やはり、**be forced to**, **be compelled to** は準助動詞らしさが無く、動詞的受身のままなのである。

4.4 be Vp.p. to に後続する動詞の変化

最後に準助動詞に後続する動詞の通時的变化を検証する。ここまで取り上げてきた準助

動詞は、元々「義務」の意味を表すものであるため、後続する動詞は動作を表すものである。形容詞的受身になれば、主語の状態や性質を表すため、状態動詞を取るようになると考えられる。Figure 2のように、be bound toに後続する動詞の変化を見ると、この流れになっていることが分かる。

Figure 2 be bound to に後続する動詞の通時的変化 (COHA)

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
1	BE	1003		4	3	10	3	6	21	14	25	40	71	101	83	123	105	92	101	81	66	54
2	HAVE	253			1	6	7	11	14	19	12	22	25	24	22	15	22	17	12	8	9	7
3	COME	197					2	1	5	4	10	20	38	21	24	15	16	5	13	6	8	9
4	DO	172		3	10	22	17	11	9	22	14	4	8	8	6	14	3	9	9	1	2	
5	MAKE	166	1	3	5	6	4	11	12	10	6	14	18	8	8	10	11	7	9	5	10	8
6	GET	151				2	3	3	3	6	8	12	20	14	8	19	9	8	12	4	8	12
7	SAY	151	2	2	7	4	9	8	24	23	21	10	13	5	4	2	5	5	2	3	2	
8	HAPPEN	110								1	7	9	7	19	9	11	15	6	8	12	6	
9	GO	105			1	1	6	6	10	7	10	8	12	9	6	5	6	4	7	4	1	2
10	RESPECT	97		1	5	3	9	18	9	16	11	8	4	3	1	2	5			2		
11	TAKE	87	1	2	9	4	5	2	6	5	8	4	7	3	4	7	4	1	4	6	1	4
12	GIVE	77		5	4	6	6	6	4	6	3	6	3	1	2	7	4	6	3		5	
13	OBEY	73	2	3	13	13	11	7	8	2	2	2	4		1			2	1	1	1	
14	SEE	59		2	3	3	4	6	6	1	4	3	5	2	4	2		2	4	3	4	1
15	ADMIT	54		2			2	7	7	4	4	3	8	7	3	1	4	2				
16	FIND	52			2		1	2	1	1	2	8	5	4	3	2	6	3	5	3	2	2
17	PAY	48		6	6	6	3	1	3	3	2	2	2	3	6	3	1		1			
18	TELL	48		1	1	1		3	1	5	5	4	3	6	7	3	2	2	1	2	1	
19	WIN	46						1	2	3	2	5	7	6	5	5	5	4		1		
20	FOLLOW	38		1	4	1	3		1	1	3	1	4	2	6	3	3	2	1	1		1
21	FAIL	37										2	2	2	5	8	3	5	4	1	3	2
22	PROTECT	36		2	7	4		2	6	5	3	2	3	1			1					
23	BECOME	35								3	1	5	5	2	4	7	3	1			3	1
24	INCREASE	34								1	3	2	1	5	5	3	4	4	2	2	2	
25	BELIEVE	33		1	1	4	5	1	5	4	1	3	4		1		1		1	1		
26	LEAD	32							1		1	1	2	5	3	5	2	2	4	3	3	
27	OCCUR	32								2		1	2	5	5	4	2	3	4	1	3	
28	SHOW	31			2		4	1	5	2	1	1	6	2		1	2		3			1
29	KNOW	30		3	1				3	2	1	1		1	3	4	2		3	2	3	1
30	LOSE	30										2	2	3	5	4	2	1	2	2	3	4

1800年代に頻度の高い動詞を挙げると、do, make, say, go, respect, give, pay 等があり、「義務」の意味との相性が高いと感じられるが、1900年代に入ると、be, have, come, get, happen, find, win, fail, become, increase 等の頻度が高くなっている。中でも1800年代前半は1例も無いにもかかわらず、1900年代に現れ始めている happen や occur は所謂、非対格動詞と呼ばれるもので、これらが使われている文は確実に認識的意味である。

これに対し、be obliged to や be forced to, be compelled to に後続する動詞の変化を示したものが、Figure 3, 4, 5 である。これらの表現は後続する動詞に be bound to ほどの大きな変化は見られない。また、happen や occur の非対格動詞のような特徴も見られず、「義務」的な意味が強く残っていることが分かる。後続する動詞の種類や通時的変化から判断しても、いかに be bound to がその他の表現と比べて準助動詞化しているかが分かる。

Figure 3 be obliged to に後続する動詞の通時的変化 (COHA)

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
1	GO	323	1	14	11	16	25	31	51	38	25	31	19	26	12	9	4	6	1	2		1
2	LEAVE	267		11	20	31	21	35	26	29	34	18	10	12	8	3	2	4		2	1	
3	TAKE	250	4	6	29	13	21	21	28	24	24	14	16	13	10	8	3	4	3	5	3	1
4	GIVE	200	2	10	15	12	22	13	21	12	21	14	13	12	9	3	5	6	6	2	1	1
5	MAKE	199	1	9	20	12	18	11	18	19	12	20	16	11	9	8	2	2	3	3		5
6	BE	188		12	14	23	27	16	22	5	13	12	13	14	3	2	5	2	2	2		1
7	DO	169	2	3	8	14	11	13	17	20	19	18	12	10	7	3	3	2	3		2	2
8	PAY	145		7	13	7	17	5	13	12	10	15	6	14	8	8	1	3	2	2	1	1
9	CONFESS	131		4	11	11	16	9	24	19	10	7	6	9	4	1						
10	KEEP	119	1	8	13	6	11	8	11	7	18	7	10	2	5	2	1	3	1	3	1	1
11	ADMIT	96	1	3	1		5	7	13	19	4	11	10	6	4	7	2		1	1	1	
12	HAVE	93	2	7	6	3	5	13	12	7	8	7	7	5	2	2	2	2	1			
13	PASS	90		10	11	9	4	8	10	13	7	6	4	4			1		2			1
14	USE	90		1	9	4	6	9	9	10	10	5	8	4	6	2	2	1		3	1	
15	RETURN	85	1	2	5	5	8	14	13	3	4	7	3	9	3	3		1	1	2		1
16	PUT	80			9	6	6	10	8	2	11	6	9	4	1	4	1	2				1
17	SAY	79	1	2	8	4	7	9	11	7	9	4	4	5		3	1	2		1		1
18	WAIT	79		1	3	3	12	10	5	8	6	10	7	3	5	2	1		1	1	1	1
19	REMAIN	77		6	4	6	7	11	10	5	2	5	3	7	3		2	1	1	2		2
20	STOP	75		4	6	2	7	7	8	9	3	5	6	6	5	2	3	1		1		

Figure 4 be forced to に後続する動詞の通時的変化 (COHA)

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
1	TAKE	323		3	5	3	2	9	13	11	13	30	19	20	31	21	22	19	20	30	25	27
2	ADMIT	256		1	3	5	5	11	22	18	17	26	23	29	20	8	14	10	6	8	12	18
3	LEAVE	243	1	1	4	12	7	14	8	10	19	11	5	18	16	18	4	19	23	9	15	29
4	MAKE	220		5	4	5	2	8	10	15	7	15	12	17	17	12	13	19	12	17	16	14
5	DO	216		2	4	5	6	5	12	6	15	16	17	18	19	9	18	10	11	15	13	15
6	GO	192		2	2	3	4	5	12	5	11	6	17	14	6	13	21	17	19	10	10	15
7	GIVE	170		1	5	4	7	8	11	16	15	17	8	8	10	10	12	6	10	11	3	8
8	PAY	152		1	3			5	4	11	11	4	5	5	12	16	9	9	15	13	16	13
9	ABANDON	123		2	5	2	6	3	4	4	6	9	12	12	13	5	8	4	2	12	7	7
10	ACCEPT	122				1	5	2	4	3	4	8	4	9	8	14	14	12	11	11	4	8
11	SELL	115	1		2			2	1		3	6	6	7	11	11	6	6	9	16	14	14
12	RESIGN	109			1	1				3	4	2	4	8	7	4	12	5	21	18	4	15
13	LIVE	102				1	2	3	1	1	6	3	7	6	11	11	4	8	10	10	9	9
14	BE	97			2	6	9	6	5	4	9	4	5	7	4	6		7	7	4	5	7
15	MOVE	93					1	2	2	1	2	1	5	5	2	8	11	14	6	12	8	13
16	TURN	87			1	2	2	2		2	7	2	8	8	8	11	7	4	11	5	6	1
17	USE	86			3	1		3	5	1	4	2	8	5	1	8	7	9	9	7	6	7
18	LOOK	85				6	3	3	4	4	4	2	3	4	4	3	5	11	6	3	13	7
19	ACKNOWLEDGE	81	1	2	4	2	11	7	4	9	7	6	3	6	1	2	2	1	2	2	5	4
20	WORK	78			1	1	3	1	3	2	3	5	6	5	6	3	6	5	6	6	8	8

Figure 5 be compelled to に後続する動詞の通時的変化 (COHA)

	CONTEXT	ALL	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
1	TAKE	167		7	11	12	11	13	13	17	21	12	16	11	9	2	2	4	4		2	
2	PAY	162		3	11	13	7	16	17	17	9	20	18	11	11	5	1	3				
3	MAKE	161	1	3	10	14	12	21	13	15	9	12	15	11	4	4	1	2	4	2	6	2
4	GIVE	148	1		8	20	10	17	11	19	13	12	10	8	4	3	6	1	1	1	1	2
5	GO	143			11	13	6	13	22	15	11	14	13	9	6	2	1	6	1			
6	DO	139	1	2	8	9	13	9	17	19	11	13	10	7	8	1	5	3			1	2
7	LEAVE	128		4	9	14	14	16	14	12	11	9	5	8	5	1	4		1	1		
8	ADMIT	106		1	6	10	9	9	18	12	5	10	9	8	4		3		1	1		
9	BE	81		5	9	12	5	5	5	6	7	8	3	5	2	2	3	4				
10	ABANDON	76	1	3	5	3	10	8	6	9	8	8	2	3	4	3		1		1		1
11	SAY	72		7	10	4	8	7	4	7	2	6	3	3	1		2	5	2			1
12	REMAIN	67		2	5	9	6	8	7	4	8	2	3	6	5		1					1
13	USE	66		1	3	1	3	4	5	13	5	8	9	6	2	2	2				1	1
14	ACCEPT	61	1	1	3	3	2	4	8	4	8	3	5	3	4	5		2	1	2	2	
15	WORK	60			3	3	2	2	5	7	10	7	4	7	4	3		1		1		1
16	LIVE	59		1	1	3		5	5	7	5	6	7	5	5	2	4	1	1	1		
17	ACKNOWLEDGE	56		1	8	5	6	5	9	7	3	4	2	2	1						3	
18	SEEK	56		1	3	6	5	6	2	7	3	6	3	3	3	1	3		2	2		
19	BELIEVE	55		5	4	11	7	3	4	4	4	2	3	1	2			1		1	1	2
20	YIELD	55		2	3	5	5	8	8	3	2	6	3	1	4	1	2			1		1

5. 結語

本稿では、準助動詞というカテゴリーの定義を見直し、その中でも *be Vp.p. to V* 構文に焦点を当てて、何故特定の表現が準助動詞になるのかを考察してきた。準助動詞というカテゴリーははっきりと独立したカテゴリーではなく、動詞と助動詞の間の連続性の中に存在する。準助動詞化が引き起こされるのは、*be Vp.p. to V* 構文においては、動詞的受身の動作主が背景化され、形容詞的受身になり主語の性質を表す表現になることが要因であることを示した。準助動詞になれば、*There* 構文での使用や後続動詞の変化などが起きることも明らかになった。

参考文献

- Bolinger, D.(1980). *Wanna and the Gradience of Auxiliaries. Wege zur Universalien Forschung*, Tübingen: Gunter Narr Verlag, 292-299.
- Carter, R., and McCarthy, M. (2006). *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chierchia, G. (1995). "Individual-level predicates as inherent generics" In: *The Generic Book*, Gregory Carlson and Francis Pelletier (eds.), 176-223.
- Comrie, B. (1976). *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (2003). *Grammaticalization*. (2nd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.
- 影山太郎. (2009). 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 大修館書店.
- Klammer, T. and M. Schulz. (1996). *Analyzing English grammar*. Boston: Allyn and Bacon.
- Krifka, M., Francis, P., Greg, C., Alice ter Meulen, Godehard, L., and G, Chierchia. (1995). Genericity: An introduction. In: *The Generic Book*, Gregory Carlson and Francis Pelletier (eds.), 1-124.
- Rosch, Eleanor (1975). "Cognitive Representations of Semantic Categories" In: *Journal of Experimental Psychology: General*, 104-3, 192-233.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and modality* (2nd ed.). New York: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (2003). Modality in English: Theoretical, descriptive and typological issues. In *Modality in Contemporary English*, Roberta Facchinetti, Manfred Krug, and Frank Palmer(eds.), 1-17., Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Portner, Paul. (2009). *Modality*. Oxford: Oxford University Press.
- Sweetser E. (1990). *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

- Traugott, Elizabeth C. (1997). Subjectification and the development of epistemic meaning: The case of *promise* and *threaten*. In *Modality in Germanic languages*, Toril Swan and Olaf Jansen Westvik (eds.), 185-210. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Traugott, Elizabeth C. (2012). Toward a Coherent Account of Grammatical Constructualization. Draft for a volume on historical construction grammar edited by Elena Smirnova JÓhanna Barodal, Spike Gidea, and Lotte Sommerer.
- Westney, P. (1995). *Modals and periphrastics in English: an investigation into the semantic correspondence between certain English modal verbs and their periphrastic equivalents*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag